
予告ホームラン

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

予告ホームラン

【Nコード】

N1734L

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ベールブルースの予告ホームランのお話です。

第一章

予告ホームラン

ベーブ・ルースの名前を知らない者はまずいないだろう。

野球を知らない人であってもだ。その大柄な身体といかつい顔からは想像もできない無邪気で素朴な性格からこの仇名になった。野球界にその名を永遠に残す名選手だ。

その彼はある時深刻なスランプの中にあった。

「ルース不調」

「どうしたスター」

こうした記事が新聞に連日連夜掲載された。それがルースをさらに苛立たせていた。

「僕だって好きで不調になっているんじゃないんだ」

こうマネージャーにも漏らしていた。

「打ちたいんだよ、僕も」

「それはわかっているけれどね」

マネージャーも彼のその心はわかっていた。

「けれど焦るとね。余計に駄目だぞ」

「それもわかっているよ」

わかっている筈がない。しかしだからこそ余計に焦る、まさに悪循環であった。

そんな彼を慰めるのは。子供達からの手紙だった。彼は子供達から圧倒的な人気を得ていた。彼と握手して二度と手を洗わないと言った子供さえいた。

そしてこの時もその手紙を読んでいた。その中の一通であった。

『僕は今病院にいます。そこでいつもラジオでルース選手の活躍を聞いています。僕はその活躍を聞いて頑張っています。ルース選手もこれから頑張ってください』

こう書かれていた。それを読み終えたルースは側にいたそのマネージャーに声をかけた。真剣どころではない。まるで知っていなければならなかったことを今ようやく知ったような顔になってだ。

「少し頼みたいことがあるけれど」

「何だい？急に」

「この手紙だけだ」

その病院から自分を応援しているという子供の手紙をマネージャーにも手渡した。そのうえでまた言うのであった。

「この子と会えるかな」

「ああ、住所に名前も書いてあるね」

マネージャーはその手紙の表を見て述べた。そこには確かにそういったものが書かれていた。

「これは病院だね」

「そこに行っていかな」

「君がかい？」

「そうだよ、僕がだよ」

彼に顔を向けて告げた。

「この子とね」

「ルース、急に一体どうしたんだい」

「この子は病院から僕を応援してくれているんだ」
手紙で読んだそのことを彼に話すのだった。

「今の不調のこの僕のことをね。それで頑張れるというから」

「是非にというのかい」

「うん、会いたいんだ」

その偽らざる本音の言葉だった。

「駄目かな、それは」

「いや、名前も住所もわかっているから」

マネージャーは彼のその切実な言葉に応えた。彼がどれだけ真剣な気持ちで言っているのかその言葉と顔でわかったからである。

「それじゃあね」

「行っているだね」

「君はこうした子供は放っておけないだろ」

マネージャーはルースのその性格を知っていた。確かに子供っぽく時として有頂天になるがだ。その性格はあくまで純真で優しいのである。

その彼の心を知っているからこそ。彼も言うのである。

「だからね」

「有り難う」

「行ってくればいいよ。そして握手してくるんだ」

「うん、それじゃあね」

こうして彼はその子供を見舞いに行った。お菓子と花束を持って。その子は白い病室の中にいてその小さな身体をベッドの中に横たえさせていた。しかしスーツのルースを見るとすぐに起き上がらなばかりになった。

「ルースさん！？本当にルースさん！？」

「うん、そうだよ」

ルースはその子ににこりと笑って答えたのだった。

「僕がそのベーブⅡルースだよ」

「嘘みたいだ、本当に来てくれるなんて」

「ははは、嘘じゃないよ」

ルースはその子に対して笑顔で話した。

「その証拠にね」

「証拠に？」

「はい、これ」

その持っていた花束を差し出した。お菓子もだ。

「君へのプレゼントだよ」

「ルースさんからのプレゼント……」

「どうぞ」

こう言ってそれを手渡したのである。

第二章

「遠慮なく貰ってくれたらいいよ」

「嘘みたいだ、こんなことって」

「だから嘘じゃないんだよ」

ルースはまた笑って彼に話した。

「僕は今こうして君の前にいるんだよ」

「そうですよね、本当に」

「それで君は」

ルースはここで子供に対して尋ねた。

「どうしてここにいるのかな」

「足が悪いんです」

男の子はそのことを尋ねられると俯いて述べた。

「足が」

「足が悪いのかい」

「はい」

その俯いた顔で述べるのだった。

「それで今は」

「そうだったのか。それで入院するのかい」

「それで今度手術します」

男の子の顔は俯いたままだった。それでもその声で言うのだった。

「今度」

「そうか、君も頑張るんだね」

ルースは彼のその言葉を聞いて言った。

「君も」

「はい」

答えはする。しかし元気はなかった。

「そうです」

「頑張ってくれ。いいね」

ルースはにこりと明るい笑顔を見せて彼に告げた。そのうえで病院を後にしようとする。しかしここで医者の一人に呼び止められたのであった。

「あの」

「どうかしたのかい？」

「あの子のことですけれど」

病院の廊下で呼び止められた。そしてそこで話をするのであった。

「宜しいでしょうか」

「何かあるのかい」

医者 of 暗い顔からすぐにそれを察した。

「何かな、それじゃあ」

「あの子は今ですね。怖がっているのです」

「医者はこう話してきたのだった。」

「手術を受けるのを」

「そうだったのかい」

「はい、手術を受ければあの子は歩けるようになります」

「このことを話すのである。」

「ですがあの子は手術を受けるのを怖がっていて。それでああして」

「そうだったのか。それで入院しているのか」

「はい、そうなのです」

「医者の言葉は沈痛なものであった。」

「それで」

「・・・・・・そうか」

ルースはその話を聞いてそれまで明るかった顔を沈痛なものにさせた。そうしてその顔で自宅に戻りその日はずっと考え込んでいた。そうして次の日だった。

また男の子の見舞いに来た。そして彼に言うのだった。

「次の試合でホームランを打ってみせるよ」

「こう言ったのである。」

「君の為にね」

「僕の為にですか!？」

「そうだよ、君の為にね」

彼は言った。

「打つよ、ホームランを」

「僕の為にホームランを」

「僕は頑張る」

ルースの声がここで強いものになった。

「絶対にね。だから君も」

「僕も」

「頑張ってくれ。いいね」

「・・・・・・僕もなんですネ」

男の子はそれを聞いたその時だ。まずは黙った。

そしてそれから。静かに言うのだった。

「頑張るんですか」

「うん、僕はそうして欲しい」

ルースは男の子の顔を見ていた。その戸惑いを感じている顔をだ。

第三章

「君にね。それじゃあ」

「・・・・・・はい」

「じゃあ約束しよう」

ここまで話すとだった。ルースは自分の右手を差し出してきたのだった。

そして男の子の右手を握りだった。微笑みを戻して彼に告げた。

「君の為にホームランを打つとね」

「ルースさん・・・・・・」

「次の試合に絶対に」

彼はまた言った。

「打つからね」

「・・・・・・わかりました」

男の子はルースのその言葉に頷いた。こうして約束が交わされた。そして次の試合だった。ルースはいつもの様に三番で出場した。

しかしであった。彼は不調のままであった。そしてこの試合もまた。

「まずいな、ルースの奴」

「ああ、今日もな」

「調子が悪いな」

ヤンキースの選手達も観客達も苦い顔になっていた。

「三打席共三振か」

「全然駄目だな」

「こりゃ今日もな」

「いや」

しかしだった。彼のマネージャーだけが違っていた。彼はこの試合のルースを冷静に見ていた。

そして言うのだった。こう。

「彼は打つよ」

「打つって!?!」

「絶対に!?!」

「三振でもこれまでの不調の時と振りが違うよ」

それが違うというのである。

「まるで台風だ。これなら」

「いける!?!」

「いけますか」

「うん、いけるよ」

今は守備についている彼を見ての言葉だ。彼は外野にいた。

「この試合はね」

「打つんですか」

「この試合は」

「今日の彼は違う」

それをわかっていいるからこそその言葉だった。

「絶対にやってくれるよ」

「じゃあ見させてもらいますよ」

「いいですね」

周りはマネージャーのその言葉にくっついてかかるようにして言ってきた。

「そのルースの打つ場面を」

「ここで」

こうして皆彼を見守ることにした。その次の打席だった。

ルースは左打席に入った。そこで。

何と外野スタンドを自分のバットで指差したのだ。ライトスタンドをだ。

「何っ、あれはまさか」

「ホームランを打つっていうのか!?!」

「つまり」

それが何を意味しているかだ。これも言うまでもなかった。

「予告ホームランか」

「まさか、絶対に打つっていうのか!？」

「それを言うのか」

誰もがこれには哑然となった。それは両チームの選手達や観客達だけではなかった。

放送するアナウンサー達もそれを聞く者達もだ。誰もがであった。「まさかルースさんは」

そこには男の子もいた。彼は自分の病室のベッドの中で哑然となっていた。

「僕の為に本当にホームランを打つつもりで」

枕元に置かれているラジオからはアナウンサーの呆然とした声が聞こえてくる。誰もが今の彼の行動を信じられなかった。まさに夢を見ているようであった。

広いグラウンドは静まり返っていた。まさか本当に打つのかと。

そして試合が動いた。相手のピッチャーが投げた。

二球投げられた。ツーストライクとなった。あと一球で終わる。

ここで終わりだと思ふ者もいた。まだだ、と思ふ者もいた。それぞれだった。

しかしルースは動かない、その心は。バットを構えたまま三球目を待っていた。

その三球目だった。ルースのバットが一閃した。それで終わりだった。

第四章

ボールは一直線に飛びライトスタンドに突き刺さった。最初は誰もが呆然となった。

「なっ・・・・・・・・」

「本当に・・・・・・・・」

「打ったっていうのか」

「ルースは・・・・・・・・」

誰もが啞然となった。しかしボールは確かにライトスタンドにある。ルースは打ったのだ。

「ホームランです！」

アナウンサーが思わず叫んだ。

「ホームランです！ルース打ちました！」

「お、おい！打ったぞ！」

「ああ、打った！」

「ルースは本当に打ったんだ！」

誰もが立ち上がって叫んだ。

「まさか。予告した通りに打つなんて」

「こんなこと見たことあったか？」

「いや、ない」

「はじめてだ」

野球がはじまって以来だ。しかしルースはそれをやったのだ。

彼はダイヤモンドをゆっくりと回る。そしてホームベースを踏んだ時。

敵も味方も彼を歓声で包んだ。彼は奇跡をやったのだ。

「ルース！」

「凄いぞ！」

「よくやった！」

歓声はそのままラジオを流れる。男の子もそれを聞いていた。

「凄いや、ルース」

彼は泣きながら一人呟いた。

「打ってくれたんだ、ホームラン」

約束通りである。本当に打ったのだ。

「僕の為に」

それがわかったのだ。そして彼は決めた。

「僕も頑張ろう」

このことをだ。

「そして手術を受けるんだ、頑張って」

そのことを決意したのである。彼のホームランを聞いてだ。

この後随分と後になっての話だ。引退し身体を崩していたルースにこの男の子が会いに来た。彼はもう立派な青年になっていた。

その彼がだ。笑顔でルースに言うのだった。

「貴方のおかげです」

こうその彼に告げたのである。

「貴方のホームランのおかげで今の僕があります」

自分で立っていてそのうえでしっかりとした顔で笑っている。あの弱々しい子供の頃の姿は何処にもなかった。彼をそういうふうにしたのは紛れもなくベーブ・ルースその人であった。彼のホームランが一人の男の子を救った、野球史に残っているあるエピソードである。

予告ホームラン

完

2009・12・14

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1734/>

予告ホームラン

2010年10月8日15時26分発行